

## 中国における「国民教育」と「少数民族教育」の相克 中国朝鮮族学校における教育課程に着目して

尹 貞 姫\*

### The Conflict between Nation of Education and Minority Education in China: Primary and Secondary School Curriculum of the Korean Chinese School

YIN Zhenji\*

#### Abstract

The Korean Chinese population composed of 2 million people is a very important minority group in China. For this nationality, it is tradition to maintain its own ethnic identity, which has made Korean Chinese distinct from other minority groups. The identity formation of Chinese Koreans is mainly due to the ethnic education conducted at many Korean schools. However, there have not been much studies done to clarify what kind of teaching plan and what kind of textbooks are in use and how teaching practices are carried out at these Korean schools. Keeping these unsolved questions in mind, this paper attempts to illustrate how the curriculum for Korean schools contributes to the formation and maintenance of ethnic identity of Korean Chinese at the elementary and secondary education level.

#### はじめに

総人口13億1300万人（国連人口基金、2004年）を擁する中国は漢族と55の少数民族で構成され、憲法上も「統一した多民族国家」と規定されている。しかし、漢族が10億人以上と多数を占めているため、人口比で見た場合55の少数民族（非漢民族）は全人口の約10%（1994年の人口センサス）を占めるに過ぎないが、実数は一億人にも及び量的には決して「少数」ではない。

現在の中国において、この55の少数民族の国家への統合をめぐる民族問題が、中国

政府を悩ませる政治問題として浮上りつつある。このような民族問題に対する基本姿勢として中国政府は、建国当時から「民族の分離権を認めず」、「統一した多民族国家」、「民族区域自治政策」という、民族政策における三大基本目標を打ち出した（毛里1998：46-50）。それだけではなく、中華人民共和国憲法はこれまで4回改正されたが、民族政策におけるこの三大基本目標だけは現在に至るまで一貫して少しも変わっていない。そのため、ここから導かれる中国の民族教育とは、少数民族地域における民族自治教育であるといっても過言ではない。

\* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程

しかし、「民族自治」をめざす中国において、実際には建国後、少数民族政策は紆余曲折をたどり、ある時期には特別優遇措置が少数民族に与えられ、ある時期には少数民族が直接的な攻撃の対象になるという危険にさらされてきたのである。この問題は、単に当時の中国政府首脳部による恣意的な判断の結果であったとするだけでは済まされない複雑な背景や構造を持っている。確かに、中国における民族自治の出発点は各民族の「平等」である。しかし、中国においてはなぜ歴史の各時期に、新しい民族政策が打ち出され、全国規模で極端に異なる結果を生み出したかについては、従来必ずしも明確にされてきたとは言い難く、十分検討に値する問題である。

ところで、中国における少数民族の中には、約200万人の朝鮮族も含まれており<sup>1</sup>、朝鮮族はほかの少数民族とは異なる特性を有している。それは、数ある中国少数民族の中でも、中国の朝鮮族は民族意識を維持している程度が最も高いことで知られている点である<sup>2</sup>。その最も重要な要因として、中国朝鮮族学校における民族教育の影響が大きいことが挙げられる<sup>3</sup>。しかし、筆者の関心はその固有な民族教育の解明そのものよりも、こうした固有な教育をもつ少数民族に対して中国政府がどのようにかかわってきたという点にある。この問題について、文化人類学や少数民族言語を研究している言語学分野の先行研究では明確な答えを示していない。

中国の朝鮮族学校における教育課程に関する研究は、管見によれば、教育史研究が主であるがために、朝鮮族教育課程における論文・著書はほとんど見当たらないのが

現実である。しかし、限りある先行研究の中でもあえて重要な研究をあげるならば、北京大学朝鮮文化研究所主編の『教育史』(1997、民族出版社)を挙げることができる<sup>4</sup>。同著書は朝鮮族教育に関する歴史研究書として、朝鮮族教育全般について概略的に論ずるにとどまっている。しかも、研究の範囲が1988年までであるため、ここ10数年の流れは把握できない。一方、日本においては、朝鮮族教育に対する研究自体がまだ少ないものの、出羽孝行の「中国の朝鮮族学校における教育課程に関する一考察」(出羽1999: 181-185)が、中国における民族政策の諸問題を朝鮮族学校の固有科目である「朝鮮語」の授業目的や「朝鮮語」教科書の編纂過程の実態から分析している。

本稿では、これらの成果の上に、中国朝鮮族において民族自治政策のもと民族自治教育が果たす役割や機能のあり方を描き、分析し解明する。つまり、彼らの民族自治教育がいかなる影響力を有しているのか、また彼らの教育を統合する中国政府のメカニズムはどのようなものであるのか、あるいはどのようなものであるべきなのかといった問題について考察を加える。また、市場経済化の巨大な波によって中国朝鮮族における民族教育がどのような方向へと変化しつつあるのかについても、明らかにしたい。従って、本稿では国家や支配的民族(漢族)と中国朝鮮族との相克や矛盾を主たる分析の対象として取り上げる。その際に、本稿では中国朝鮮族教育全体を概括的に論じるにとどまるのではなく、中国朝鮮族の教育内容を最も的確に反映している中国の朝鮮族学校における教育のソフト面(教育課程)に焦点をしばり、上記の諸点の解明

を試みる。なお、本稿においては主として義務教育段階である中国の朝鮮族小中学校を分析の対象としている。

ちなみに、現代中国における教育課程に関する文章には「授業計画」(原語は教学計画)、「教学大綱」(原語も同じ)がありこれに基づいて「教科書(教材)」が編纂される(中国の授業計画と教学大綱は日本の学習指導要領に当たる)。「授業計画」は、小学校・中学校・高校の各教育段階における教育の目的、教学活動を指導するものとして、主に教育課程の設置と設置の順序及び授業時間数の配分などについて規定している。「教学大綱」は授業計画に基づき、各教科の教学内容を詳しく規定する文書であり、主にその教科の目的と各章、節で伝達される知識の範囲及び実習や宿題などについて規定している。

## 中国朝鮮族学校における授業計画

### 1. 現行の授業計画の制定

中国の義務教育段階の授業は1994年に公表された『九年制義務教育小・中学校教育課程』(以下「教育課程」と略す)に則って実施されている<sup>5</sup>。中国の朝鮮族学校における授業計画は、中国国家教育委員会が定めた全国統一の授業計画を基準として、国家教育委員会民族教育司の指導の下、延辺朝鮮族自治州教育委員会で作成し、全国の朝鮮族小中学校で使用している。そして、朝鮮族小中学校で使用されている現行の授業計画の基準は、1994年に制定された「延辺朝鮮族自治州朝鮮族教育条例」に基づいて作られたもので、小学校及び中学校を義務教育段階の一貫した課程に通用されている。これは、1995年に中国の朝鮮族小学校の全

学年で導入されたものであり、1994年から全国の小中学校で全日制学校週五日制が実施されたことに伴い、時間数や内容が若干調整された。

一方、中国のどの学校においても授業計画は中央レベルの教育機関で制定され、中央、地方、学校の3つのレベルで管理されている。そして、朝鮮族小中学校における全課程については、中央レベルの国家民族事務委員会が授業計画を決定し、各科の教学大綱を作成して、教材の企画・編纂・審査を行っている。そして、地方レベルの延辺教育行政部門では、中央で計画された教育内容に基づきつつ、朝鮮族の実状に照らして実際に実施される省レベルの授業計画を制定し、中央に報告する。最後に民族学校レベルでは、地方で制定した授業計画に基づいて具体的な時間割を作成し、内容を確定してから、延辺教育委員会に報告し、指示を仰ぐことになっている。以上から分かるとおり、民族学校における授業計画の修正や審査権は民族自治政府ではなく、あくまでも中央レベルの国家民族事務委員会に属しており、民族自治政府は随時中央の指示を仰がざるをえない<sup>6</sup>。

### 2. 教育課程の概要

中国の義務教育段階において、現行の教育課程は1994年に公表された『教育課程』によって実施される。しかし、中国の民族教育はあくまでも中国における国民教育の一部分であることから、民族学校で実施される教育もその基本原則は上述した教育課程に基づかなければならない。

従って、朝鮮族学校と漢族学校における教育課程は構造上、朝鮮族学校に朝鮮語と

いう民族語の科目が一つ多く設置されている以外は、何の変わりもない。中国朝鮮族学校における教育課程は、大別して「学科

類課程」と「活動類課程」により構成されている。表1は、「学科類課程」と「活動類課程」を対照したものである。

表1 朝鮮族学校における「学科類課程」と「活動類課程」対照表

課程項目	学 科 類 課 程	活 動 類 課 程
目 標	子どもに実践の活動を通して、探求の態度と創造力を養成し、科学の研究の方法を習得し、総合的な知識を応用する能力を育むことを目指す。また、学校と社会の繋がりを増進し、子どもの社会的責任感を培い、情報技術を利用する意識・能力を養成し、基本的な労働技術を把握することを図る。	生徒の主体性と創造性を培い、生徒の政治思想、道徳の自覚性を深め、視野を広げ、頭脳と身体を同様に発展させ、各方面の能力の向上と興味・関心及び個性の伸張を目指す。
内 容	情報技術教育、探究性学習、社会实践及び労働と技術教育など	朝の会、班・団体活動、科学技術文芸活動、体育活動、社会实践活動、など

(出所) 中国義務教育における「教学計画」の制定 <http://www.hz4z.net:83/course/000511.htm> (2003年9月1日参照)。

ここでいう「学科類課程」とは、「数学」や「自然」などのいわゆる教科を指しているが、これらはすべて必修科目である。朝鮮族小学校段階における必修科目としては、「思想品德」「朝鮮語」「漢語」<sup>7</sup>「数学」「社会」「自然」「体育」「音楽」「美術」「労働」の10科目があり、中学校段階では「思想政治」「朝鮮語」「漢語」「数学」「外国語」「歴史」「地理」「化学」「生物」「物理」「体育」「音楽」「美術」「労働技術」の14科目を履修しなければならない。

一方、「活動類課程」は日本の特別活動に類似した諸活動であり、1994年に公表された教育課程によって正式に教育課程の中に取り入れられただけでなく、必修ともなった。朝鮮族学校における「活動類課程」の詳細な内容は下記のようなものである。

まず、「朝の会」では国旗掲揚の儀式を行い、「時事・政策と日常行為規範」についての教育を実施する。この「朝の会」では、祖国を愛し、国家の時事に関心を持たせる

ことによって朝鮮族の子ども達に「私は中国人で、中国は私の祖国」であるというような国家を愛する感情を沸かたせる内容で、愛国心に関する教育を徹底させることが意図されている。

「班・団体活動」は、一クラス或いは少年先鋒隊（共産党の末端組織とも言える）を単位として、特定の目的のもと多様で活発な活動を行うことにより、生徒の自己管理能力、集団意識、協力精神及び相互の交流を図る。この活動では、主に朝鮮族の子どもたちが指導者や共産党幹部に対する尊敬の念やまた政治的情操を育むことが目指されている。このような手法は、児童期に政治的権威に対する愛着感情の植付け、政治体系のさまざまな事象（例えば中国政府）への愛着や支持の形成を目的としているのである。

「科学技術文芸活動」は、科学技術、文芸、体育等の内容であり、子どもが自由意志で参加することができる。この活動は、子ど

もの趣味・特技を伸ばし、幅広い知識を身につけることを目指している。

「体育活動」は、ラジオ体操、目の体操<sup>8</sup>と他の体育活動を含み、生徒の体力を高め、自ら身体を鍛える習慣を身に付けさせるようにする。学校によっては民族教員の自由意志によって朝鮮族の伝統体育競技、例えば朝鮮相撲（原語はシルウム）などを教える場合もある。

「社会実践活動」には、社会生産労働と社会ボランティア、社会調査、見学訪問及び軍事訓練などの活動が含まれる。この活動は中国教育の特徴の一つとも言えるが、生徒達に工業・農業及び社会、地域と触れ合う機会を与えることによって社会主義制度の優越性を認識させ、労働者への感情と社会的責任感を養うことを目指している。また、ここでいう見学先は地域や学校によってまちまちであるが、毎年全校生徒が必ず見学する場所として中日戦争とかかわりのある革命歴史遺跡などがある。これは、歴史上の侵略の実態の展示を通じて、各民族共通の国家意識を奮い立たせ、愛国主義教育の効果を高めることを意図している。また、工業、農業及び社会、地域と触れ合う経験を通じて、社会主義制度の優越性を認識させ、労働者への尊敬と社会に対する責任感を養うためでもある。

「学校の伝統的な活動」は、各学校の具体的な状況と合わせて行う教育活動である。その具体的な活動には、国家の記念日、民族の伝統的な祝日、学校の体育祭及び文化祭などに行われる。そして、朝鮮族学校にとって最も重要な記念日は、「6・1子どもの日」と「9・3民族記念日」である。この日になると、朝鮮族の子どもだけではな

く学校周辺に住むほとんどの朝鮮族が学校に集まって、民族伝統行事を行いながら記念日を祝う。

以上のようなものが「活動類課程」の内容であるが、「活動類課程」は「学科類課程」と比べた場合、その割合が極めて少ないことが分かる（表2を参照）。しかし、市場経済体制の下での民間セクターによる経済活動が拡張される中、個人主義が社会で蔓延することを防ぎ、民族児童・生徒の間で社会主義の優越性に対する感情の涵養を図るためにも、教育課程における「活動類課程」が強化されつつあるのは注目すべきところである。

ちなみに、朝鮮族学校における教育課程の各構成部分の年間の配当時間数を表したものが、表2である。

### 3. 漢族学校と朝鮮族学校における教育課程の比較

ここでは、朝鮮族学校と漢族学校における教育課程の内容上の違いを見てみたい。朝鮮族学校と漢族学校における学校間の差異は、上述したとおり教授用語（朝鮮族学校での教授用語は朝鮮語）の違いと朝鮮族学校には朝鮮語という民族教科科目が1つ多く開設されているだけで、それ以外の教育課程の中身はまったく同じである。表3は、国家教育委員会が1994年に公布した「9年制義務教育課程」と、これに基づき翌年の1995年に延辺教育委員会が公布した「朝鮮族小・中学校教育課程」を整理したものである。

中国における「国民教育」と「少数民族教育」の相克

表2 朝鮮族学校における各教育活動の年間配当時間

	小学校	中学校
授 業	34週	34週
期末試験	2	3
学校の活動	1	1
社会実践活動	1	1
自主裁量	1	1
長期休暇	13	12
計	52	52

(注) 1. 初級中学校最終学年の後半の学期は、授業を2週間減らし、卒業試験に当てる。長期休暇は、冬休み、夏休み、農繁期休暇及び祝日を含む。

2. 朝会、班・団体活動、体育活動は学校の活動に含まれ、科学技術文芸活動は自主裁量に含まれる。

(出所) 中国義務教育における「教学計画」の制定 <http://www.hz4z.net:83/course/000511.htm> (2003年9月1日参照)

表3 6 - 3 制全日制朝鮮族・漢民族小中学校教育課程における各科目配当時間の比較(1)

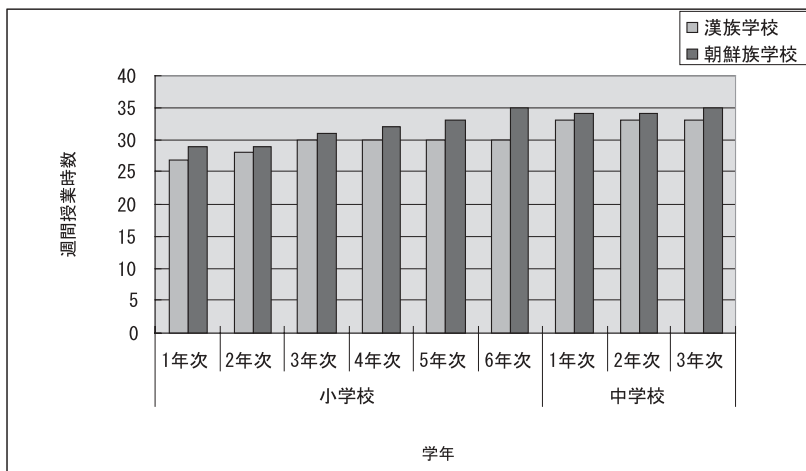
科目	学年	小学校						中学校			9年間合計			%2)	
		一	二	三	四	五	六	一	二	三	朝鮮族 学校	漢族 学校	差異		
思想品德	朝3)	1	1	1	1	1	1								2.0
	漢4)	1	1	1	1	1	1				204	204	0	2.1	
思想政治	朝							2	2	2					1.9
	漢							2	2	2	200	200	0	2.1	
国語5)	朝	8,7	6	6	6	6	7	3	3	3					15.5
	漢	9	9	9	8	7	9	6	5	5	1615	2200	-585	22.6	
漢語文6)	朝		4	4	4	4	5	4	4	4					11.9
	漢										1241	0	1241	0.0	
数 学	朝	4	5	5	5	5	5	5	5	4*					14.0
	漢	4	5	5	5	5	5	5	5	5*	1454	1454	0	14.9	
外国語1	朝							3	3						2.0
	漢							3	3		204	204	0	2.1	
外国語2	朝							4	4	4					3.8
	漢							4	4	4	400	400	0	4.1	
社 会	朝				2	2	2								2.0
	漢				2	2	2				204	204	0	2.1	
歴 史	朝							2	2	2					1.9
	漢							2	2	2	200	200	0	2.1	
地 理	朝							3or2	2						1.4
	漢							3or2	3		153	153	0	1.6	
自 然	朝	1	1	1	1	1	1								2.6
	漢	1	1	1	1	1	1				272	272	0	2.8	

物 理	朝									2	3											
	漢									2	3	164	164	0								1.6
化 学	朝										3											1.0
	漢										3	96	96	0								1.0
生 物	朝									2or3	2											1.5
	漢									2or3	2	153	153	0								1.6
体 育	朝	2	2	3	3	3	3	2	2	2	2											7.2
	漢	2	2	3	3	3	3	2	2	2	2	744	744	0								7.6
音 楽	朝	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1											4.9
	漢	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	508	508	0								5.2
美 術	朝	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1											4.9
	漢	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	508	508	0								5.2
労 働	朝				1	1	1	1														1.3
	漢				1	1	1	1				136	136	0								1.4
労働技術	朝									2	2	2										1.9
	漢									2	2	2	200	200	0							
週当たり総時数7)	朝	23	23	25	27	28	30	30*	30*	27*												83.2
	漢	21	22	24	25	25	25	29*	29*	25*	8656	8000	656									
朝 会	朝	毎日 10 分ずつ																				
	漢	毎日 11 分ずつ																				
少年先鋒隊・ 共青团活動	朝	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											2.9
	漢	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	304	304	0								3.1
科技文体活動	朝	4	4	3	2	2	2	2	2	2	2											8.4
	漢	4	4	3	2	2	2	2	2	2	2	878	878	0								9.0
週当たり総時間数	朝	5	5	4	3	3	3	3	3	3	3											11.4
	漢	5	5	4	3	3	3	3	3	3	3	1182	1182	0								12.1
地方が定めた時間	朝	1	1	2	2	2	2	2	1	1	5*											5.5
	漢	1	1	2	2	2	2	2	1	1	6*	568	568	0								5.8
週当たり活動総量	朝	29	29	31	32	33	35	34*	34*	35*												100
	漢	27	28	30	30	30	30	33*	33*	33*	10406	9750	656									100

- (注) 1. 中国の小中学校における教育課程の基準は6-3制と5-4制の2種類が制定されているが、ここでは6-3制の基準を示した。しかし、地方レベルの朝鮮族学校と漢民族学校では、地域や居住の状況などにより多少修正される場合もある。
2. 週当たり総授業時数の中に占める各科目の割合。
3. 朝 = 朝鮮族学校。
4. 漢 = 漢族学校。
5. 朝鮮族学校の場合は国語が朝鮮語、漢族学校の場合は国語が漢語になっている。
6. \*は朝鮮族学校では「日本語」、漢族学校では「英語」科目の外国語を開設した場合の時数。
7. 1単位時間は、小学校は一般に40分、初級中学は45分である。
- (出所) 文部省編「中国」『諸外国の学校教育 アジア・オセアニア・アフリカ編』平成8年9月19頁と、黄道南、金明蔡「延边朝鮮族学校における教授事業の現況と課題」『中国朝鮮族教育の現況と展望』1995年、154頁を参照し、筆者作成。

図1は表3に基づいて、週当たり活動総量に関して朝鮮族と漢族の小中学校における週当たり授業時数の差を示したものである。

図1 朝鮮族学校と漢族学校における週間授業時数の比較



(出所) 表3を参照し筆者作成。

図1より明らかなように、朝鮮族学校はどの学年においても週当たり授業時数が多い。これは朝鮮族学校の場合、他の教科は漢族学校と同様に進行しているのに対して、民族語の科目である「朝鮮語」が多いからである。「朝鮮語」科目は、朝鮮族が自民族

の言語、文化に触れ合う最も肝心な科目として必要不可欠であるが、学校の授業時数が限られているなか、朝鮮語の時間が漢族学校の学生よりも負担になっているのが現状である。

表4 朝・漢両学校の教科別時間数割合の比較(%)<sup>1)</sup>

科目	学校	朝	漢	割合差
朝鮮語		15.52	0.00	+ 15.52
漢語		11.90	29.00	- 17.10
算数		13.97	19.00	- 5.03
外国語		2.99	5.30	- 2.31
思想品德・思想政治		3.88	5.30	- 1.42
社会・歴史・地理		5.35	7.30	- 1.95
自然・物理・化学・生物		6.58	9.00	- 2.42
体育・音楽・美術		15.26	24.00	- 8.74
労働・労働技術		3.20	4.40	- 1.20

(注) 1. 朝・漢両学校の年間総時間数からみた各科目の割合を表したもので、(±)は朝鮮族学校が基準。2. 小数点以下第3位を四捨五入したため、割合の合計は100にはならない。

(出所) 表3を参照し、筆者作成。



表4は、年間授業時数の中に占める教科別時数の割合を比較したものである。表4に関して指摘できることは、朝鮮族の学校では小学校第1学年から中学校第3学年までの全授業時数のうち、朝鮮語が15.52% (1,615時間) を占め、漢語は小学校第2学年から中学第3学年までに11.90% (1,241時間) を占めているという、言語科目重視型の教育課程である。ここから、中国の朝鮮族学校では漢語も相当重視されていることが分かるが、この2科目だけで全授業時数の3分の1以上を占めていることや、他の科目は内容や授業時数上、漢族学校とまったく同じであることから、朝鮮族学校の場合、漢語の授業時数も漢族学校よりは負担になっていることが分かる。しかし、学校の授業時間数が限られていることを考慮すると、朝鮮語を重視するということが、一般的に言えば漢語を軽視することになりがちである。そこで、中国政府は朝鮮族学校に対し総授業時数を増加させることによって漢語の授業時数を保障している。

それだけではなく、漢語の扱いに注目すると、学年が高くなるにつれ朝鮮族学校における漢語と朝鮮語の位置が逆転していることが分かる。表5のように、朝鮮族学校における朝鮮語と漢語の差は1学年上半期の5時限から1学年下半期の3時限へ、さらに第2学年からの2時限へと減り続けており、中学校段階においては漢語の授業時数が朝鮮語の授業時数を上回っていることが分かる。その理由としては、もちろん中国政府側の政治的圧力も考えられるが、より根本的な原因としては朝鮮族知識人自身が、現状を考慮したうえで引き出した結論であることが推察される<sup>9</sup>。なぜなら教授用語がすべて朝鮮語であり、漢語の授業時数が漢族学校より遥かに少ない状況の下で、朝鮮族学校の卒業生の漢語能力では卒業後中国社会における職務遂行上、多大な支障をきたすことが懸念されるからである(表5を参照)。

表6は、朝鮮族学校と漢族学校の国語授業時数の差を見たものである。

表5 朝鮮族学校における朝鮮語と漢語の週間授業時数の差

言語		学年		小学校						中学校		
		1	2	3	4	5	6	1	2	3		
週時間	朝鮮語	8	7	6	6	6	6	7	3	3	3	
	漢語	3	4	4	4	4	4	5	4	4	4	
	(±)1)	+5	+3	+2	+2	+2	+2	+2	-1	-1	-1	

(注) 1. ±は朝鮮語が基準。

(出所) 表2を参照し、筆者作成。

中国における「国民教育」と「少数民族教育」の相克

表6 国語授業時数の朝・漢比較（小・中）

国語		学年		小学校						中学校		
		1	2	3	4	5	6	1	2	3		
週 時 数	朝1)	8	7	6	6	6	6	7	3	3	3	
	漢1)	9	9	9	9	7	7	6	5	5		
	(±)2)	-3	-3	-3	-3	-1	0	-3	-3	-3		
年 時 数	朝	255	204	204	204	204	238	102	102	102		
	漢	306	306	306	306	238	238	204	170	170		
	(±)1)	-51	-102	-102	-102	-34	0	-102	-102	-102		

(注) 1. 朝 = 朝鮮族学校、漢 = 漢民族学校。2. (±) は朝鮮族学校が基準。朝鮮族学校における国語は朝鮮語、漢族学校における国語は漢語と見なしている。

(出所) 表2を参照に筆者作成。

これ以外の科目として、近年では早期からの外国語教育に関心が高まり、中学校1年生からであった外国語教育が1996年以降は小学校第4学年から開始される地域も増えている。外国語の種類としては、従来はすべての朝鮮族学校において日本語教育を実施していた。しかしながら、市場経済体制発足後、英語に対する需要が高まる中、本来の日本語に英語が加わり、どちらかを個人の好みによって選ぶことができるようになった。その結果、ほとんどの朝鮮族生徒が日本語を学習していた状況は一変し、とりわけ中国のWTO加盟などによる英語需要の高まりに伴い、最近では英語を勉強する生徒が日本語を学習する生徒を遥かに上回っている<sup>10</sup>。しかし、急増する英語選択生徒数とは裏腹に、英語教員の養成、採用が追いつかない問題がたびたび発生している。そのため、一部朝鮮族学校においては、生徒の選択意志を無視し、学習成績をもとに外国語クラスを編成したりする場合もある。しかし、これは教育を受ける機会の不平等の問題を招かざるをえない。

なお、独立した科目にはなっていないが、

その重要性が指摘された教育内容として「職業指導」「人口教育」「環境教育」などがある。こうした内容はそれぞれ「労働技術」「生物」「地理」などの個別科目の関連部分に合わせて授業を行っており、独立した科目として開設している学校は少ない。また、市場経済化の波による中国経済の著しい成長に伴う労働力の不足を解決するために、普通の朝鮮族学校においても当該民族地域の経済状況に適合した職業指導や訓練の拡充が行われており極めて注目に当たる。近年その重要性がますます高まっている「コンピュータ教育」については、現在延辺州市内の中学校に台数は少ないもののそのための設備がほぼ備えられており、条件の整っている学校では「必修」科目として採用されているところもある。しかし、一部山岳・農村地域の朝鮮族学校においては、民族学校の経営すらままならないため、コンピュータの設置などは想像し難いことである。教育条件におけるこのような格差は市場経済体制発足後広がる一方である。

また、朝鮮族が自民族の歴史や事情を理解する上で欠かせない民族歴史や民族地理

については、「世界史」や「世界地理」の中で朝鮮史や朝鮮地理として簡単に触れられるに過ぎないため、朝鮮族児童・生徒の中には「秦の始皇帝」は知っていても、「世宗大王」<sup>14</sup>を知らないものが極めて多い。

こうした授業計画上の欠陥を補い、朝鮮族生徒の民族意識を高めるため、朝鮮族学校では近年以下のような点に力を入れている。一つは、1996年から延辺第一中学（高校）で「朝鮮民族史」科目が試験的に開設されたことである。この科目は生徒や教員の間での評判が良く、ほかの高校でも実施されるようになっただけでなく、将来的には小学校や中学校への拡大も望まれているようである（出羽1999：182）。もう一つは、漢族学校でも設置されている科目であり、民族固有の伝統文化などについて教育できる科目として「体育」、「音楽」、「美術」などを挙げることができる。これらの教育課程の目的も漢族学校とまったく同じであるが、中国政府があらゆる面で優れた人材を養成するために大量の時間を割り当てている利点を利用して、朝鮮族学校では現在のところ、こうした科目の中に民族的色彩を持たせるように試みている。例えば、「音楽」では伝統的民謡や童謡を教えており、「体育」では朝鮮族における独特なスポーツ「シルウン（日本の相撲に相当する）」や「グネ（日本のブランコに似ている）」などを身につけさせることを試みている。

それにもかかわらず、漢族学校と同一の科目が圧倒的に多いという事実には変わりがなく、民族独自の学科目が限られている状況の中でいかにして生徒の民族教養を高めるかは、朝鮮族教育関係者たちの頭を悩ませている最も重要な問題である。

## 中国朝鮮族学校における教科書

### 1. 朝鮮族学校の教科書に関する規定

教科書は、どの国においても教授・学習の中心となる教材である。中国の学校教育で使用される教科書は、国家教育委員会直属の人民教育出版社が建国以来、執筆・編集・出版してきたが、1985年に教科書検定委員会（原語は「全国中小学教材審定委員会」）が発足してからは検定制度も始まり、人民教育出版社以外のごく一部の大学出版社なども教科書作りに参加できるようになった。一方、少数民族に関しては、国家教育委員会と国家民族事務委員会が1992年に配布した「少数民族の教育を強化することに関するいくつかの意見」において、「民族自治機関では少数民族の文字による教材の編集、出版および検定を強化すべきである」と指摘された（金1998：46 - 50）。そのため、朝鮮族学校で使用される教科書は「東北三省朝鮮文教材協議小組」で計画され、「全国朝鮮文教材審査委員会」が審査した後に「東北朝鮮民族教育出版社」が独自に発行することになった。しかし、民族独自編纂教材以外は北京民族教育出版社で発行されたものを翻訳して出版しているのが現状である。すなわち、朝鮮族学校における教科書は民族独自の教育内容が含まれている一部科目の教科書（「朝鮮語」科目）を除いては、原則として漢族学校の教科書を翻訳したものを使用している。これは教育課程が漢族学校とほとんど変わらないことの結果であるともいえる。

教科書の大きさは、A4版やB5版サイズである。分量は科目によってまちまちであり、200頁から300頁ぐらいの幅がある。学

期区分も漢民族学校と同様に2学期制を採用しているため、各科目の教科書は1学期で1冊を終了させる程度の内容量で編集されている。例えば、「朝鮮語」教科書は小1で第1及び第2冊を学習し、小2で第3及び第4冊を、小3で第5及び第6冊を学習するといった順番になっている。しかし、1冊の教科書で2学年以上にわたって使用されている教科書もある。例えば、「生物」、「化学」、「物理」など理科系の教科書は、2学年にわたって使用される場合が多い。

## 2. 教科書内容の基準

こうした教科書は全国統一の「教学大綱」に基づいて編纂されるが、各科目の教学大綱とも数十ページに及ぶ内容なので、ここで個々に紹介する紙幅の余裕はない。しかし、共通して言えることは、教科書が教授・学習の中心であることから、教科書の効率的な活用が目指され、そのため教科書を生徒に十分理解・使用させる努力がなされている。例えば、教科書の位置付けや役割についての説明が、その表れであろう。教科書の「はしがき」には必ずと言っていいほど当該教科の狙い、性格、内容（構成）が説明され、何をどのようにして、なぜ学ぶのかを明らかにしている。また、どの科目も、教科の狙いの部分で、社会主義的な世界観を持った人間の育成について触れている点では一致しているが、民族固有科目としての朝鮮語以外は中国朝鮮族などの少数民族の固有な文化や価値などに触れることがほとんどない。そして、たとえ自然科学関係の科目であっても、「祖国の偉大な科学者」を積極的に取り上げているのが特徴である。ここでは、「歴史」と「社会」の例

を挙げてみることにする。

「歴史」の教科書では、「序言」の説明部分で必ず「義務教育段階における歴史は生徒の理解できる範囲で社会発展の歴史の合法則性を科学的に教え、資本主義の消滅、共産主義の勝利の必然性についての信念を生徒に育て、歴史の真の創造者、物的・精神的価値の創造者としての人民大衆の役割および歴史における個人の意義を明らかにすることを助けるものでなければならない」（中華人民共和国国家教育委員会1996：1）と述べられており、社会主義の勝利を歴史の必然性としてとらえ、その役割を担う人民大衆を前面に出すことにより、いわゆる弁証法的唯物観が貫かれている。

「社会」科でも、授業時数は小学校4、5学年で週2時間ずつしか行われていないが、ここでは共産主義社会がいかに優れた社会であり、資本主義社会は「搾取機構として必ず滅亡の運命にあること」、「社会主義から共産主義へ漸次移行すること」などが記されている。そして、「中国共産党こそ中国社会の指導力であり牽引力であること」が強調されている<sup>12</sup>。

## 3. 朝鮮族学校における教科書の編纂及び問題点

中国は、解放後の50数年の間に、学校教育における「教学大綱」を8回、教科書を9回の改訂している（白1996：274）。国家によるこのような調整に応じて、朝鮮族学校でも教学大綱は8回、教科書においては9回の改訂が行われている。そして、現在最も新しい教学大綱は1992年8月に制定され、2000年9月に修正が行われた「9年義務教育全日制小学・初級中学課程計画」で

ある。この新しい教学大綱によってすべての教科書も新しく編纂されつつある。しかし、現行の教科書編纂は下記の画期的な規定・改革なしではありえなかった。

まず、1985年1月に教育部（1986年6月からは教育委員会に改称）は「全国小中学校教材検定委員会工作条例（試案）」を公布し、更に1986年には「中華人民共和国義務教育法」を公布した。この義務教育基本法<sup>13</sup>では、「…義務教育の実施に当たって、地方が義務教育全般に対して主な責任をとる…」と規定していたため、当然、義務教育段階の教科書の編纂・検定に関しても、地方が責任を負うことになった。そこで、1987年10月に「全国小中学校教材検定委員会規約」と「小中学校教材検定基準」及び「小中学校教材の検定方法」が一斉に公布された。そして、「全国小中学校教材検定委員会規約」

によると、地方で使用する教材（郷土教材、選択教材、補助教材）の検定は、省、自治区、直轄市の教育行政機関が実施できるようになった。この規定により、朝鮮族学校における教科書の検定も、一部ではあるが「東北三省朝鮮文教材協議小組」で実施し、「全国朝鮮語文教材審査委員会」が審査した後、「東北三省朝鮮民族教育出版社」が順次発行されるようになった。

しかし、朝鮮族学校では、民族独自の教育内容が含まれている一部科目の教科書を除いて、原則として漢民族学校で使われている教科書の翻訳版を使用している。その上、独自編纂教材であっても、その内容がすべて朝鮮族に関するものではない。表7は、現行の朝鮮族小学校で使用されている独自編纂教材である朝鮮語、音楽、美術、体育の中に、民族作品が占める割合である。

表7 朝鮮族小学校における独自編纂教材の中で民族内容が占める割合

学 年	科 目	朝鮮語		音 楽		美 術		体 育	
		単元総数	民族関係 単元1)数	単元総数	民族関係 単元数	単元総数	民族関係 単元数	単元総数	民族関係 単元数
一年生	上半期	26	6	15	4	28	6	28	6
	下半期	18	3	16	3	9	4	28	8
二年生	上半期	17	3	17	7	30	4	30	8
	下半期	17	5	17	3	28	5	30	5
三年生	上半期	14	5	20	6	22	8	30	5
	下半期	15	3	17	4	26	9	30	10
四年生	上半期	14	3	19	8	14	5	30	13
	下半期	14	6	18	8	16	5	30	13
五年生	上半期	20	6	12	6	15	4	28	11
	下半期	21	6	12	3	17	6	28	12
六年生	上半期	17	6	12	6	14	5	28	7
	下半期	17	3	12	5	11	3	28	10
合 計		210	55	187	63	230	64	348	108
割 合		26%		34%		26%		31%	

（注）1）朝鮮族民族関係内容とは朝鮮族民族伝統文化と中国朝鮮族、韓国、朝鮮の現代文化もすべて含まれている。

（出所）宋英哲編「朝鮮族中学校の民族文化資質教育に関して」延辺教育科学研究所『延吉教育』2001年第1期11頁 14頁を参照し、筆者作成。

表7を見てもわかるように、たとえ独自編纂教材であっても民族関係の内容は30%前後と依然として低い割合であることがわかる。しかし、問題はこれだけにとどまらない。この点に関連して、独自編纂教材でもあり民族固有科目である朝鮮語教科書の問題を分析してみることにする。

中国の朝鮮族小中学校における朝鮮語教材の充実は、改革開放政策実施以来、飛躍的な発展を示してきた。それは、翻訳作品が100%を占めていた文化大革命時代とは異なり、現行の朝鮮語教科書には韓国、朝鮮、中国朝鮮族作家の作品も大きな割合を占め

ることになり、驚くほど分厚かった教科書も現在は子供たちの過重な学習負担を軽減する立場から、その内容も大幅に削減されている。これは、朝鮮族の生徒達に民族文化伝統を継承し、それを発展させるために積極的な役割を果たしているといえる。

しかし、朝鮮語教材を編集するにあたって、翻訳作品はもちろんのこと朝鮮語になっている作品そのものを原文のままのせることに関しても多大な問題が露呈している。表8は有名な朝鮮作家趙明熙の「洛東江」<sup>14</sup>原文と現行の朝鮮語教科書に採録された「洛東江」を比較したものである。

表8 「洛東江」原文と現行の朝鮮語教科書に採録された「洛東江」文の比較

「洛東江」原文	朝鮮語教科書の中の「洛東江」
狼の群れみたいな奴らがやってきて村民達の食料を奪っていった。	<u>日本鬼子まで</u> やってきてこの地を占領し、村民たちの食料を奪っていった。
彼は不平等を不平等と思わないことになった。曇った天気もはれた天気と思うように。	彼は <u>この地域をふるさと</u> と思わないことにした。曇った天気もはれた天気と思うように。
「うわさどおりだ。あんなに元気だったが人がこんな姿になるなんて、ひどい刑罰を受けたに違いない。残酷な人たちだ。」	「うわさどおりだ。あんなに元気だった人が <u>死にそうになったなんて、拷問をうけた跡が残っている。あれをみて。</u> 」
そこで独立運動が勃発した。	そこで、 <u>3.1運動</u> が勃発した。
南朝鮮も含めて社会運動団体を作り上げ、正当な運動だけに力を尽くすことになった。	<u>南朝鮮運動を統一してより高い社会主義革命闘争を組織するための論文</u> を書けることになった。
当局に何回も問い合わせたが、何の連絡もなかった。村民達は指を切つてまで誓いながら抗議するつもりであった。	<u>総督府</u> に何回も問い合わせたが、何の連絡もなかった。村民達は子供たちまで組織して抗議するつもりであった。
村民達は悲憤に目を赤くして	村民達は <u>力を合わせて</u>
日が暮れる前にあなたは行ってしまった。	日が暮れる前に <u>革命闘士であるあなたは</u> 言ってしまった。
爆発弾のようである。	<u>活火山</u> のようである。

(注) 左右欄の太字で下線が付されている部分が違うところである。

(出所) 2003年、東北朝鮮族教育出版社編朝鮮族中学校3年2学期の教材から選出、「洛東江」原文と現行の朝鮮語教科書に採録された「洛東江」を比較して筆者作成。

このように、同じ作家によって書かれたまったく同じ文章であっても、「狼の群れみたいなのやつら」が「日本の鬼」になったり、「社会運動団体」が「社会主義革命闘争組織」に、単なる「あなた」が「革命闘士であるあなた」になるなど、朝鮮語教科書では原文とは少なからぬ違いが見られる。これは、「独自編纂教材」とはいつても政治が深く絡んでおり、朝鮮族の学生にも中国人としての政治的情操を持たせることを目的としていることの説明にほかならない。このような手法は、児童期から外国による侵略に対する恨みの感情を植え付け、政治機構のさまざまな事象（例えば中国政府）への愛着や支持を形成することを目的としているのである。

翻訳作品をみても、問題の深刻さが窺える。中国で有名な魯迅<sup>15</sup>の「故郷」と言う文章は朝鮮族中学校でも「重点中の重点」文章として教えられているが、「アナグマ」を「チョウセンモグラ」と、「角鶏」を「野鳥」と、「忙月（一ヶ月の期限で作男として働くこと、またはその人）」を「マンウェ」と朝鮮語の中の当て字を使って音訳しているのである。こうした不正確さは、朝鮮族の学生たちが真の中国文化を習得する上で朝鮮語を習得する上でも多大な障害をもたらしている。

また、独自編纂教材を使用するに当たっても問題点は少なくない。中国朝鮮族の間には生活環境などにより学校教育のレベルにも格差が見られる（キン1995：180 - 183）。延辺朝鮮族自治州が中国国内において唯一の朝鮮族民族自治区域であるとはいえ、朝鮮族が分散居住している都市部と集中居住している農村部とでは学校教育の内

容などにおいてかなりのばらつきが見られる。例えば、分散居住地域の朝鮮族は漢語が第一言語である場合が多く、朝鮮語は第二言語に位置付けられる。それに対し、集中居住地域の朝鮮族にとっては朝鮮語が第一言語となり、言語教育における朝鮮語の比重が高くなる。そうした状況にもかかわらず、どちらの居住地域の学校でも全国朝鮮族学校用「朝鮮語」の教科書を1種類用いるのみである。そのため、集中居住地域の朝鮮族学校ではより高度な内容の朝鮮語教科書が求められているのに対して、分散居住地域の朝鮮族学校にとっては教科書の内容がやや難しいといわれる傾向が見られる<sup>16</sup>。もちろん、統一的な教学大綱の下で地域に合う教材を編纂して使用することは可能となってきているが、地域の予算不足のため必要な教育費の調達が難しく、今でも実現できる見通しが付かないのが現状である。しかし、こうした地域間格差は朝鮮族同士の階層格差が拡大されることが懸念される。

中国朝鮮族学校の教科書問題においてはほかにも、教材の分量が多いため学生たちの負担が過重である問題、教材の審査事業が追いつかない問題、課外読み物が漢族学校より遥かに少ない問題<sup>17</sup>などが挙げられるが、これらに共通していることは教育費不足の深刻さである。

## 終わりに

以上のように、本論文では中国における民族自治教育のあり方を、朝鮮族義務教育段階における授業計画の現状及び教科書の編纂、問題点を通して述べてきた。中国における「民族自治」の出発点には、各民族

の平等を実現させたいという中国政府の目標があった。しかし、現在の民族自治教育がこの目標にどれだけ近づけたのかという観点から判断すれば、その道のりはまだまだ遠いものであると言わざるを得ない。中国朝鮮族学校の教育課程においては、授業計画の制定や教科書の編纂が、一部ではあるが、自治区内における教育行政機関において実施されるようになってきているが、その修正・審査権はあくまでも中央レベルの国家民族事務委員会に属していることが分かった。これは、中国の少数民族地域における民族自治が、不可分の統一国家、党の指導という強い枠のもとでの地方自治であるがために、漢族に対する教育と少数民族に対する教育が、「異なる」民族自治教育と言ってもそれはあくまで中国の国民教育の一部であり、国民教育の目的は個人ではなく国家の需要を最大の特徴としているからにはかならない。

また、民族自治教育とはいっても漢族とは異なる少数民族に対する教育の場合、特に中華民族の形成という課題が強調されている。これは、本稿で述べてきた朝鮮族学校における「活動類課程」の特徴からも十分に窺い知ることができる。「朝鮮民族言語文字を理解して応用する学生の能力を高め、知能を発展させると同時に学生に社会主義思想性と愛国主義精神を育てること」<sup>18</sup>が、朝鮮語教科書を編纂するにあたっての目的の一つになっているのを見ても、少数民族生徒に対する国家意識の涵養が重視されているのは明らかであり、それが少数民族意識の育成のみを突出させにくい一因となっていると思われる。

しかし、問題はこれだけではない。中国

共産党の社会主義市場経済の導入は、従来の経済構造に起因する貧困の平等から決別する最後の道であった。その驚異的成果は朝鮮族学校においても様々な形で現れている。しかし、注目すべきことは市場経済化の波により都市部と山岳・農村部における朝鮮族学校の教育条件に巨大な格差が生まれていることである。これは必然的に山岳・農村地域における入学率だけでなく、特に教育の質において巨大な格差を生み出し、朝鮮族同士の地域間格差が拡大されることが懸念される。また、市場経済化により英語学習の需要が高まる中、英語教師の養成、採用が追いつかず、児童・生徒の外国語選択の意志を無視して外国語クラスが編成される事実からは教育機会の公平さも疑わざるをえない。

一方、中国のような広い国土と膨大な人口を抱え、しかも各地方の格差が非常に大きい国では、地方の力に頼らず国だけの力で教育を実施することは不可能に近い。そこで、中国政府は「教育体制改革に関する決定」を出し、教育課程においても、義務教育の実施に伴い、少しずつではあるが地方分権化を進める方向を取りつつある。この文脈からいえば、少数民族教育も中国を構成する地域教育の一部分として、その中の自民族もしくは地方政府の役割をより強化することが望まれる。

今後の課題としては、本稿で扱った狭い学校教育に限定するのではなく、学校以外の要素（家族環境、社会環境、国際関係）が中国朝鮮族の民族教育にどのような役割を果たしているのかについて、考察の対象を広げていくことが必要である。



## 注

- 1 国連人口基金 <http://www.unfpa.or.jp/publication/2004.polf>
- 2 この点に関する先行研究として韓相福ほか(1993)を挙げることができる。
- 3 中国第5回人口センサスによれば、延辺州では万人ごとに占める大学生の割合が594人であり全国平均の1.7倍にもなっている。
- 4 このほかにも、朴圭燦主編『中国朝鮮族教育史』東北朝鮮民族教育出版社、1991年(朝鮮語)、金在律主編『延辺朝鮮族自治州教育誌』東北朝鮮民族教育出版社、1992年(漢語)、鄭藩辰主編『教育誌』民族出版社、1997年(朝鮮語)などを挙げることができる。
- 5 中国においては2001年に新しい授業計画が公表されてはいるものの、一部地域でしか試行されておらず、全国範囲で実施されるのは2005年からである。
- 6 「延辺朝鮮族自治州朝鮮族教育条例」第9章の第47条では「自治州自治機関は国家の教育方針、法律及び関連規定によって朝鮮族教育における発展企画、各レベルの学校の設置、学制、学校の運営法、教学内容、教学用語及び学生募集などを決めなければならない。」と定められている。
- 7 ここで言う「朝鮮語」「漢語」は単なる語学教育を目指す教育ではなく、様々なジャンルの文学作品等を通して民族文化及び中国文化の習得を目指す科目である。
- 8 視力の低下を防ぐために中国政府が開発した、指圧法による目の体操であるが、中国では、小学校などで休み時間に一斉に行われている。
- 9 聞き取り調査で尋ねた延辺朝鮮族自治州で何人かの現役教員と一緒に会話をする機会があった。民族教員であるかれらは驚くほど口を揃えて現在社会における漢語の重要性を強調していた。
- 10 李長植、「朝鮮族小学校の生徒達が漢族学校へ転学或いは韓族学校で勉強する現象に関する一考察」『文化山脈6』2002、延辺教育出版社、162頁。
- 11 朝鮮・李朝の第4代王(在位 1418-1450)李朝中、最も傑出した英主で「大王」と呼ばれる。錢貨の通用、農業の発展振興、「ハングル」(訓民正音 フンミンジョンウム)の制定、「高麗史」の撰修等、多大な功績を残した。
- 12 中国特級教師教育教学研究網 <http://www.chinajyyj.com> (2003年9月3日参照)
- 13 中華人民共和國義務教育法 <http://www.xyz-jm.com/home/dyyd/flfg/yiwujyf.asp> (2003年9月3日を参照)
- 14 趙明熙(1894~1942)は朝鮮の有名なプロレタリア文学作家である。その代表作が「洛東江」(1927年)である。この小説は、当時の階級意識や政治意識を盛り込んだ小説として評価されている。物語は、あるプロレタリアの運動家が逮捕されるが、体を悪くして保釈されることになった時に、彼に労働運動や階級運動を指導された人たちが迎えに行く場面から始まり、どうして彼の教えを受けたかといういきさつが語られている。その中に、白丁(ベクチョン)であったローザという名前の女の人が出てきたり、その人たちはいかに差別を受けているかという話が出てくる。また、朝鮮の農村での話がいろいろ紹介されている。その後、彼が病気で死んでしまうが、彼の意志を引き継いだローザは満州に行き、彼女がその運動を続けるという哀愁を帯びた雰囲気で終わる。
- 15 中国の作家、批評家、文学史家。本名は周樹人、字(あざな)は予才、魯迅はその筆名であるが、ほかにも多くの筆名を用いた。巴人、唐俟、旅隼、孺牛、豊之余、洛文、韋索などである。ただ、一般的には魯迅として最もよく知られる。「故郷」は魯迅の代表作のひとつとして、『呐喊』の中に収められている。背景としては、1919年の末、魯迅が

## 中国における「国民教育」と「少数民族教育」の相克

帰郷して家を整理して、北京へ移住したときの体験が題材になっていると思われる。この作品の主な登場人物は「私」と「私」の親友である「閩土（るんとう）」である。

- 16 この現象を中国朝鮮族教育界の知識人達は集中居住地域における「空腹」現象、分散居住地域における「消化不良」現象と名づけている。
- 17 朝鮮語文字になっている朝鮮族小中学校の課外読み物は50種類をやっと超える状態であるが、漢族学校における課外読み物は1万種類以上に達している。
- 18 『義務教育初級中学校教科書 朝鮮語』1997年、第一巻。東北朝鮮民族教育出版社。1頁。

### 参考文献

- 大塚豊・小川佳万.1996.「中国」『アジア地域の中等教育の内容と評価法に関する調査研究』平成8～10年度科学研究費補助金研究成果報告書平成11年3月：15.
- 韓相福ほか.1993.「第五章 国家及び民族意識」『中国延辺の朝鮮族』ソウル大学出版社：93-110.
- キンキョンアン.1995.「朝鮮語文教材建設の基本経験と課題」崔相録・池青山・金龍哲『中国朝鮮族教育の現状と課題』延辺教育出版社：180-183.
- 金龍哲編訳.1998.『中国少数民族教育政策文献集』大学教育出版.
- ジュゼヘン.2002.「吉林省朝鮮族教育の基本状況と発展戦略に関する思考」『文化山脈6』延辺教育出版社：142-146.
- 中華人民共和国国家教育委員会編.1996.『小中学校歴史学科思想政治教育綱要』人民教育出版社.
- 出羽孝行.1999.「中国の朝鮮族学校における教育課程に関する一考察」『関西教育学会紀要』23：181-185.
- 東三省朝鮮語文教材編纂グループ編.1997.『義務教育初級中学校教科書朝鮮語文』第一巻。東北朝鮮民族教育出版.
- 南日成ほか.1995.『中国朝鮮語文教育史』東北朝鮮民族教育出版社.
- 白月橋.1996.『課程変革概論』.河北教育出版社.
- 朴金海.2002.「21世紀中国朝鮮族教育の発展進路に関する思考」『文化山脈6』延辺教育出版社：60-74.
- 毛里和子.1998.『周縁からの中国 民族問題と国家』東京大学出版社.